

「しっかり根を張れ ゆっくり芽を出せ」

県立神戸高等学校長
新谷 浩一

○ good times & bad times

大きな行事が続くなか、華道部が飾ってくれた生け花です。メッセージが添えられています。『花材はストレリチア、カーネーション、ドラセナです。本日はALTのコーナー先生がお稽古に来てくださいました。日本の文化がこのようにして伝わっていくことを嬉しく思います』。

コーナーといえばボート部員と一緒にウェイト・トレーニングに励む姿を見かけますが、文化部にも参加していたのですね。その興味関心の幅広さには驚きます。まさに文武両道ですね。



さて、夏から秋にかけても運動部の活躍は目立ちました。まずは山岳部。先月に行われた近畿高等学校総合体育大会登山の部において、男女アベック優勝を果たしたのです。男子は夏の県大会に続いてですが、一方で女子は悔しい準優勝に終わり、全国インターハイを逃していますから、雪辱を果たしたことになります。



また、同じ時期に行われた県の新人戦で活躍し、個人で4種目、リレーで2チームが近畿大会の出場権を獲得してくれたのが水泳部です。加えての嬉しい知らせがあるということで校長室を訪れてくれました。兄弟校の兵庫高校、長田高校に星陵高校を加えての4校定期戦についての結果報告とのこと。以下は顧問の井上先生のお言葉です。

『第61回四校定期戦が9月20日に本校にて開催されました。昨年度に引き続き男子は優勝を収めることができました。2位の長田高校とは7点差の僅差でしたが、全員で力を合わせて掴み取った価値ある勝利でした。女子は部員4名と少ないなか、第3位とよく健闘しました。本校OBや長田高校OBも多数応援に駆けつけてくださり、懸命に泳ぎ、応援する高校生の姿に大きな感動を覚えました。来月の近畿大会でもいい結果が残せるように頑張りたいと思います』。



このたびの生け花の真ん中、上向きに咲くストレリチアの花言葉は「輝かしい未来」、「すべてを手に入れる」、「情熱」などです。この花は南アフリカ原産で、日本では「極楽鳥花」とも呼ばれています。その名の通り、エキゾチックな南国の鳥を彷彿とさせるような姿が特徴的です。

近畿大会では廣田七海さんが女子100m平泳ぎで6位入賞を果たしました。残念ながら今一つ力を発揮できなかった選手もいたそうですが、ストレリチアのように上を向いていれば、「輝かしい未来」はやがて見えてくるのかもしれないですね。

さて、一方で母を亡くしてから1年ということで、音楽会の翌々日、私は母の一周忌を執り行いました。母について書いた過去の通信を添えます。読んでいただけると幸いです。

かくして私は去年、両親を見送ることで9年間の遠距離介護を終えることとなりました。それでも様々な手続もあり、度々、帰郷しました。その際、ひとつ自分に課したことがあります。それは『辿る』ということです。時間を見つけては生まれた街や幼いころに暮らした街、祖父母の眠るお墓など、自分のルーツに関わる場所を『辿る』ことにしたのです。

発見がありました。なかなか自転車に乗れるようにならない私を連れ、父が何度も通ってくれた小学校は長々と続く坂道の果て、しかも校庭は校門からさらに階段を下ったところでした。「鈍くさい、怖がりな息子が手間をかけさせたね」私は父に深く頭を下げました。

かつて通った幼稚園の壁には緑色のプレート。50年もの時を超え、私に語りかけます。だから、うまくいかない時は口ずさむのです。『しっかり根を張れ ゆっくり芽を出せ』と。



「病めるときも 健やかなるときも 彼女が愛してくれたから 僕は自分自身のことを少しだけ好きになれたのです」

高校教育課長
新谷 浩一

○ 教員の頃、僕はこんなことを学級通信に書いていました

『母から電話があった。花を贈ったので、そのお礼の電話だった。「もう、いいのに」って母は言うけれど、おかあちゃんは一生おかあちゃんだもんね。「もういい」わけない。

離れて暮らすようになって、もう 16 年になる。まもなく一緒に暮らした歳月を、離れて暮らした歳月が越えていくのだろう。僕的人格形成に少なからぬ影響を与えた母。年間に休みが 10 日ほどしかとれない、こんな働き方をしているので、会えるのは正月くらい。それは淋しいことのような気もするけれど、「つまらない、つまらないって言いながら、働いているよりはいい」と母は言う。確かにその通りなのだろう。

まだ上手に母のことは語れない。うまい感謝の言葉も見つからない。いつまでも忘れられないのは中学生の頃のこと。よく問題を起こしては学校に母と呼び出されたっけ。自転車に乗れない母を後ろの荷台にのっけて、学校までペダルを漕いだ。母はそういうときまって、何も言わなかった。じっと黙ったままだった。あれがいちばん辛かったね。あれがいちばん辛かった。償うこともできないまま、時は過ぎゆく』

○ 昨日は母の日でしたね

指導主事となる前年の母の日に書いた学級通信。親孝行なんて何ひとつ出来ていない自分を戒めるような文章です。結局、ともに暮らしたのは 19 年。20 歳になる年に離れて暮らすようになり、それから毎年カーネーションを送っていました。でも、もう 7 年ほど前に花の世話どころか自分自身の世話さえできなくなったので、送るのを止めました。それでも当時は父が元気なこともあり、1 年間は老老介護をしてくれていました。

父はおかずこそスーパーの惣菜を買っていたものの、米を炊き、味噌汁をつくり、食器も洗ってくれていました。洗濯機を回し、拭き掃除をし、母の下の世話もしてくれていました。だから月に何度か帰省する僕が母にできることと言えば、おかずのストックをつくり、冷蔵庫や冷凍庫に並べることや風呂につからせてあげることでした。かつて母がつくってくれたように麻婆豆腐の豆腐を絹ごしにするととても喜んでくれました。

しかし、母の認知症の進行は早かったですね。あっという間に、その世話は父の手には負えなくなりました。そこで施設を回り、父が自転車で会いに行けるよう家から近い施設を選び、預かっていただくことになりました。やがて父も認知症になります。数年前まで父の日には好物の魚の干物を送っていたのですが、自分で魚を焼くことも出来なくなってしまったので、それも止めました。僕は父の日も母の日も失ったのです。

ふと思います。早くにご両親を亡くされた方は切ない父の日と母の日を過ごしてこられたのでしょね。幸か不幸か、この歳になってようやく親孝行のようなことができた気がする僕も、遠かれ早かれ両親そのものと別れる日が来るのでしょ。年齢を重ねるということはこうして 1 つ 1 つ失っていくことなのですね。

児童虐待や育児放棄のニュースに触れる度に胸が締め付けられるのは、その 1 つ 1 つの事例に何も関与できない自身の無力さを思い知らされるとともに、欠点だらけの不肖の息子にただ寄り添ってくれた母のかつての姿を思い出すからですかね。

生まれ落ちる環境を人は選べません。だからこそ今いる場所で必死に伸びようとする生徒が大切にされる学校づくりを精いっぱい手伝いたいな、改めてそう思う母の日です。



「百周年記念式典のあとの話」

県立加古川東高等学校長
新谷 浩一

○ 10月26日、その日は以前から…

「加古川東高校の百周年はとても重たいけれど、あんたなら何とかするやろ。頼みますよ」。藤原教育長にそう告げられた3月から、ずっとこの日のことを気にかけていました。何度も失敗する夢を見ました。壇上の隣の席で教育長はしかめっ面をしています。そんな夢です。だから27日を心の支えにしていました。川本先生が箏曲部のステージのチケットをわけてくれたのです。無事に式典をやり遂げ、翌日は心穏やかに琴の音に耳を澄ます、そんな自分を想像していました。しかし、現実には甘くありません。

9月に入ると、認知症で施設にお世話になっている母の体調が一気に悪化し、半ばには医師から「もったとして、ひと月」と伝えられました。急ぎ埼玉県にある母の施設に向かいました。食事が摂れなくなっているようで栄養剤を点滴で補給するようになっていました。ご飯をつくるのも、ご飯を食べるのも大好きな母ですが、両方でできなくなってしまったのです。それはあまりに辛い現実でした。

その後、何度か母を訪ねるために夜行バスで往復しました。母はやがて声も発せなくなってしまいました。それでも僕の顔を見ると足を動かして僕を蹴ろうとします。何か伝えたいことがあるのでしょうか。何度も何度も蹴られましたが、母が僕に何を伝えたいのかは解らず仕舞いでした。

10月23日、「今週末まではもたないかもしれない」そう医師から告げられました。さすがに私も人の子なので気持ちはぐらぐらと揺れ動きました。埼玉に飛んでいき、母に会いたい気持ちがありました。でも、26日は200人近い来賓の方を迎える大切な式典の日です。そこに穴を空けることは校長としては許されません。だから毎朝、祈るようになりました。あと4日、あと3日、あと2日、あと1日…。

26日の朝も祈りました。「式典と祝賀会が終わったら、すぐに新幹線に乗るので、もうちょっとだけお願いします」と。果たして母は頑張ってくれました。ようやく施設に着いたのは22時を回ってからでしたが、目こそ閉じていたものの母は呼吸をしていました。高校生になる私の娘が一緒でした。彼女は修学旅行から帰宅した翌日でしたが「ババに会えるなら会いたい」と言って一緒に来てくれたのです。

母の頬に触れて「ありがとう」と私は伝えました。母は一瞬まぶたを開きましたが、すぐに閉じてしまいました。足を動かしてもくれませんでした。施設の方のご厚意で私と娘はそのまま母の近くで横になりました。明け方、再び母の頬に触れました。まだぬくもりはあります。少し安堵した私と娘は5月に息を引き取った父のお墓にお花をあげに行きました。「もう少しでも…」と父にお願いしました。

翌日の朝は保護者の方から、お話を聴く約束がありました。そのため日曜の遅い時間に帰宅し、月曜は朝から学校に。1時間ほどお話を聴きし、笑顔で学校を出られる保護者の方を見送った直後、電話が鳴ります。母が息を引き取ったという知らせでした。母は保護者の方との約束も守らせたかったのです。再び私は埼玉に向かうこととなりました。



母が認知症と診断されてから、もう9年が経過します。その間、遠距離介護を続けてきましたから、いつかはこんな日が来ると頭では解っていました。それでも現実にはその日が来ると、受け入れるのは難しいですね。

「おにいちゃんは浩ちゃんの埼玉出張を待っていたし、多加子さんは浩ちゃんの仕事の目処がつくのを待っていたんだもんね」。父の弟にあたる叔父から告別式の席でそう声を掛けられます。「不肖の息子なんで僕が心配で仕方がなかったんですよ」私はそう返しました。東高に赴任させていただいたこと、両親を見送ったこと。やたらと『運命』という言葉の重みを感じてしまうこの1年ではあります。